

五木寛之自選文庫
エッセイシリーズ

五木寛之
風に吹かれて



EDVARD MUNCH

角川文庫

五木寛之自選文庫
〈エッセイシリーズ〉

かぜ ふ
風に吹かれて

いつ き ひろゆき
五木寛之



角川文庫 2637

昭和四十五年四月十日 初版 発行
平成元年十月五日 改訂初版 発行
平成元年十二月二日 改訂初版 発行
平成十一年七月十日 改訂十二版 発行

発行者

角川歴彦

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三

編集部(〇三)三三三八—八四五—

電話 営業部(〇三)三三三八—八五二—

千一〇二—八一七七

振替〇〇—一三〇—九—一九五二〇八

印刷所 新興印刷 製本所 本間製本

装幀者 杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部サービスセンターにお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

風に吹かれて

五木寛之



角川文庫 2637

目次

赤線の街のニンフたち	九
おでん屋とテレビ局	一七
25メートルの砂漠	二四
歌はどこへ行つたか？	三三
横田瑞穂先生のこと	四〇
先生商売に悔あり	四五
鯨とカメラと青年	五四
私たちの夜の大学	六二
最初のミニスカート	七〇
SKDの娘たち	七九
トーポリの流れる街	九二

モスクワの天保銭

欧州無宿の若者たち

誇りたかき日本人

アカシアの花の下で

二十二年目の夏に

新宿西口の酒場で

われらの時代の歌

サーカスの歌悲し

飛行機によせる郷愁

光ったスカートの子

ある晴れた日の午後

奇妙な酒場の物語

競馬その他について

女を書くということ

一〇〇

一〇七

一二四

一三三

一三九

一六六

一四三

一五五

一五九

一六六

一七三

一八二

一八九

一九六

わがダンス研究小史	二〇三
おろしや語奇談	二二〇
流行歌はどこへ行く	二二八
花の巴里の流し歌	二三六
奇妙な事務所の午後	二四四
古本名勝負物語	二四九
自分だけのひとり言	二五〇
ひとりでする冬の旅	二五八
わが新宿青春譜	二六六
百年よりも二十年	二七四
優しき春の物語	二八一
あわて者の末期の目	二八九
森と湖に囲まれた国	二九六
赤線と青線の間に	三〇三

北国のオプローモフ

三二〇

春宵一刻価六千金

三二八

スポーツの戦後史

三三五

果てしなきさすらい

三三三

角川文庫版へのあとがき

三四〇

「風に吹かれて」の三十年

三四三

解説

村上龍

三四六

風に吹かれて

赤線の街のニンフたち

ある作家から、

「きみはセンチウ派か、センゴ派か」

と、きかれた。

ピンときたので、

「センチウ派です」

と、答えた。

その作家は口尻にしわをよせてかすかに笑うと、それは良かった、と言った。良かった、と言うべきではないかも知れない。だが、私には、その作家の言葉にならない部分のニュアンスが、良くわかった。

おくれはせながらも、センチウへ線中へ派の末尾に位置したのは、良か

ったと思う。だが、良かったから元へもどせ、などとは言いたくない。滅んだものは、もうそれでおしまいだ。どんなに呼んでみたところで、ふたたび返るときはしない。

後はただ白浪ばかりなり――。なんの文句だったろうか。終わったお祭り。紀元節。失われた祝祭を復活させようとするのは、空しいことだ。私は、そう思う。

良かった、というのは、過去の記憶を飾るささやかなリボンにすぎない。戦前派は皆、それぞれのリボンを頭に結んでいる。私のそれは、短くて貧弱だ。だが、風が吹くたびに、そいつが揺れるのを私は感じる。そのことを少し書こう。いわゆる赤線廃止のまえに、その巷に一瞬の光陰を過したへ線中派の感傷である。

そのころ私は、池袋の近くに住んでいた。立教大学の前を通りすぎて、もつと先だ。

十畳ほどの二階の部屋に、十人ほどのアルバイト学生が住み込んでいた。私もその一人だった。

呆れるほど金のない連中ばかりで、なんだかいつも腹をすかしていたように思う。

仕事は専門紙の配達である。業界紙とは言わずに、専門紙と言っていた。世のなかに、これほど様々な新聞があることを、私はその職場ではじめて知った。有名なものもあり、そうでないのもあった。

株式新聞、重工業新聞、日本教育新聞などが有名なところだった。ほかに数十種の専門紙があった。

毎朝、まだ暗い東京の街を、私たちは青い自転車をとばして出勤した。目白を通り、飯田橋を抜け、日本橋の一角まで、十数台の自転車を連ねて全力疾走する。

事務所で各自の新聞を揃え、配達にかかるのだが、その地区たるやべらぼうな広さだった。

そのため私は今でも、月島や、佃島のあたりの露路を頭のなかに思いうかべることができし、町屋や、葛西橋あたりの地理もくわしい。

「ついに一ドル相場出現……」

という証券新聞の大見出しを憶おぼえているから、たぶん世間は景気が良かったのだろう。

だが、私たちの景気は、少しも、良くなかった。配達を終えて、また自転車
を池袋方面へ走らせる時には、うんざりしていた。金もなかったし、ひどく疲
れていた。

そんななかでも、やはり時には女のいる街へ出かけた。どこをどう工面した
のか、記憶にはない。今おぼえているのは、ファジエーエフとか、カタールエフ
とか、オストロフスキーとか、その度に古本屋へ持って行った作家たちの名前
だけだ。

新宿二丁目あたりは問題にならなかった。あんな所はブルジョア階級が豪遊
する場所だと思いこんでいた。一度だけ、配達用の青自転車で駆け抜けたこと
がある。豪華さと、美人が多いのに驚嘆した。少くとも、当時の私には、そう
思われた。

私が時たま出かけるのは、北千住きたせんじゅの街だった。立石たていしや、鐘ヶ淵の方面へは、
近くの採血会社の帰りに寄ったりした。

新宿は、それらの辺境の街といろんな面で違うように観察された。だいいち、名前が高級だった。英語や、フランス語や、ドイツ語の名前の店が、そこにはあった。

私の知っている北千住の店は、正直楼といった。女の子の名前が、マツという。それにくらべると、新宿には、アンヌとかエリカなどという女がいそうない気がした。

視線が会うと、ずっと伏目になって半身を扉の陰に引くようにする。新宿の客は知的なので、こんなソフィステイケーションが有効だったのかも知れない。私はそんな新宿に感心したが、自転車からは降りなかった。私の行くのは、お化け煙突の街だった。

月のなかばに、週末をさけ、出来れば雨降りの夜をえらんで三河島の駅から歩いた。夜半を過ぎると、四百円位で泊ることが可能なこともあった。

だからといって、決して待遇が悪いということはなかったように思う。女の足音を待ちながら、雨の夜明けに戦前の「家の光」などを読んでいると、そのまま眠ってしまうことがあった。朝、五時から自転車を走らせているのだから、

無理もなかった。

冬の終り頃ごろだったろうか。そのまま、女が金を帳場ごうばに持っていった間に、眠り込んでしまったらしい。目を覚ますと、五時だった。女は私の隣りで寝ていた。

「なぜ起こさなかったんだ」

「だって、兄ちゃんあにが、あんまりぐっすり寝込んでるもんだから——」

東北から出て来て六か月という女の子は、しんそこ恐縮おそくしているように見えた。自分が帳場ごうばに行ってもどって来た何分かの間に、あんたはもう眠っていた、よほど疲れているに違ちがいがないと思って起こさなかったのよ、と彼女は言った。

「帰る」

と私は言つて服を着た。早朝の配達配達の時間がせまっていた。

「まだ暗いよ」

「配達配達の仕事があるんだ」

彼女は、玄関くわんで私の靴くつをそろえ、

「ごめんなさいね」

と、訛^{なま}りの強い言葉で囁^{ささや}いた。

「そこまで送っていく」

私は、その日に限って青自転車に来ていた。車のスタンドを靴先でボタンとはねて、私は走りだした。

「ちょっと待って」

と、女がうしろから叫んだ。彼女は着物の前を片手で押さえて玄関に駆け込んだ。何か果物^{くだもの}でも持って出てくるのだろうか、と私は想像した。女が出てきた。

「ほら。後のタイヤが抜けてる」

と、彼女は手に下げてきた空気ポンプを差出して言った。私は、がっかりしたが、自転車を立て、空気ポンプを受け取った。

「あたしがやってあげる」

女はたくましい腕を見せて、空気ポンプを押した。ギュッ、ギュッと音を立て、タイヤが固くなった。

女はポンプをはずすと、手でタイヤをにぎり、